

〈物事との関与〉を表す表現の意味の成立

—「手」, 「足」の慣用句—

有 蘭 智 美

要 旨

本稿は、意味的に分解不可能な慣用句のうち、身体部位を表す語（身体部位詞）の「手」または「足」を構成要素に持つ表現の比喩的意味の成立について考察する。本稿で対象とするのは、文字通りの意味が手や足に関する行為を表しており、表現全体の比喩的（慣用的）意味としては物事との関与を表す慣用句であり、それらの複数の表現の慣用的意味の成立には特定の認知プロセスが関与しており、体系的に動機づけられていることを示す¹⁾。

キーワード：身体部位、慣用句、メタファー、メトニミー、シネクドキー

1 慣用句の慣用的意味の成立を支える認知プロセス

慣用句は、個々の構成要素の意味が慣用的意味の部分に貢献しない、意味的に分解不可能な表現であり、Gibbs and Nayak (1989) は、*kick the bucket* (〈死ぬ〉) や *chew the fat* (〈世間話をする〉) のような分解不可能な慣用表現の文字通りの意味とその慣用的意味の関係は、恣意的であると述べている²⁾。しかし、初山 (1997) の分析に見られるように、多くの慣用句において、個々の構成要素の意味が慣用的意味の部分にそれぞれ貢献しなくとも、句全体の意味が全体的な慣用的意味に貢献しており、慣用句の意味の成立においても、我々の日常経験やそれについての知識による動機づけが存在するものもある。例えば、「手を上げる」という表現は〈殴る〉という慣用的意味を表すが、個々の構成要素である「手」や「上げる」はどれも慣用的意味の一部に貢献するような意味を担ってはならず、「手を上げる」のように連結した形ではじめて〈殴る〉ことを表すため、分解不可能な慣用句である。しかし、この文字通りの意味が表す〈手を上げる〉ことと慣用的意味が表す〈殴る〉ことの関係は恣意的なものではない。我々は、句全体の文字通りの意味が表す〈手を上げる〉という行為が、慣用的意味が表す〈殴る〉という行為の前に生じるということを日常的に経験しており、概念上、この二つの行為は時間的に隣接しているとみなされる。従って、〈手を上げる〉ことを表す形式によってその後生じる〈殴る〉ことを表すこの慣用句には、隣接性に基づくメトニミーによる、句全体での意味の拡張が関わっているといえる。

伊藤 (1999: 95-97) は、慣用句の慣用的意味の成立を考察する際に、「慣用句の具象性」というものを「慣用句の中でそれぞれの構成要素が、その文字通りの意味により表している事柄」と定義し、これに着目する必要があることを、日独慣用句の対照研究において主張している³⁾。

伊藤 (*ibid.*) の以下の例を見てみよう。

(1) a. 手を汚す

b. *sich nicht die Finget schmutzig machen* (=自分の指を汚さない)

saubere Hände haben (=きれいな手を持っている)

伊藤によると、(1a) では、〈身体部位を汚す〉という具象性が示されており、この具象性に基づいて〈違法な、あるいは不利益を被るような仕事を行う〉という慣用的意味が生じている。(1b) のドイツ語の例では、〈自分の指を汚さない〉や、〈きれいな手を持っている〉という具象性を持つ表現が、〈自ら罪を犯さない〉という慣用的意味を表すようである。これら表現では、それぞれの構成要素が文字通りの意味で示している具象性に基づいて、慣用句としての意味が生じており、伊藤は、慣用句の具象性と慣用的意味の間に次のような関係を認めることができるとしている。

(2) 身体部位を汚す=否定的な仕事を行う

身体部位を汚さない=否定的な仕事を行わない

伊藤の分析は、分解不可能な慣用表現においても、複数の表現に共通する関係があることを示し(、それが日本語とドイツ語の複数の慣用句においても共通することを示し) た点で興味深い。しかし、伊藤はその関係を提示してはいるものの、慣用表現の具象性と慣用的意味が「いかにして関連付けられているか」については説明していない⁴⁾。ある表現が、本来の意味とは別の意味を表す時、そこには何らかの意味拡張のプロセスが関与している⁵⁾。そこで本稿では、特に「手」あるいは「足」を構成要素に持つ慣用句を対象に、(2) の文字通りの意味が表す事態と慣用的意味が表す事態を結ぶ「=」の部分が、メタファー、メトニミー、シネクドキーという認知プロセスによる結びつきであることを示し、ある身体部位詞が慣用句を構成する際に、なぜその身体部位詞が選択されているのか、さらには、それによって我々がある事態をどのように捉えているのかを、特に概念メタファーにおける二つの領域の構造的対応を示すことによって明らかにする。また、共通の基盤に基づき慣用的意味が成立している複数の慣用句を分析対象とすることによって、多くの慣用句の意味の成立は、恣意的であるどころか十分に動機づけられており、また、その拡張は体系的に行われるものであることを明らかにすることができる。

ここで、言語表現の意味の拡張に関与する認知プロセスについて確認しておく。本稿では、羽山 (2002) 等を参考に、認知プロセスを以下のように定義する。

メタファー： 二つの概念領域における事物同士の類似性、あるいは二つの概念領域間の類似性に基づき、その一方によって他方にアクセスする認知プロセス

メトニミー： 二つの事物の外界における隣接性、さらに広く二つの事物・概念の思考内、概念上の関連性に基づき、ある事物や概念によって別の事物や概念にアクセスする認知プロセス

シネクドキー：ある概念領域内の類種関係に基づき、概念領域においてより一般的な事物や概念によって、同一領域内のより特殊な事物や概念にアクセスする、あるいは逆に、より特殊な事物や概念によって、より一般的な事物や概念にアクセスする認知プロセス

概念領域とは、概略、物事に関する要素やそれらに関する情報を含む知識の総体であり、ある語の意味はそれに関連して特徴づけられ、理解される (Langacker 1987)。これは、人間という存在に共通する一般的な身体経験だけでなく、文化的相違や、場合によっては個人的経験をも反映する (Croft 1993)。言い換えれば、概念領域というのは、概念化者によって定義される動的なものであり、ゆえにある概念領域内の要素やそれに関する知識は個人や状況によっても変化しうるということである。言語表現は、これらの認知プロセスによって、文字通りの意味から比喩的意味が生じる。その際、上記の三つのうちのどれか一つのプロセスが関与する場合もあれば、複数の認知プロセスが関与する場合もある。Barcelona (2000) や Goossens (2002) 等は特に、メトニミーがメタファーの基盤になることがあり、単にメタファーのみによって動機づけられた表現よりも、メトニミーに基づくメタファーに動機づけられたケースの方が実際には多く見られると主張している⁶⁾。本稿で扱う慣用句においても、複数の認知プロセスが慣用的意味の成立に関与するケースが見られる。

2 文字通りの意味が「手」に関わる行為を表す慣用句

まず、「手」を構成要素に持つ慣用句の意味を見てみよう。手は、対象に接触する際に顕著な部位である。「手」を含む慣用句の文字通りの意味は、対象との物理的接触を表し（あるいは含意し）、さらにその慣用的意味は、物事との関与に関わる意味を表すものが多い。まず、以下の表現を見てみよう。

- (3) この問題にも彼は久しい前から手を付けている。今後彼がこれをどう取り扱うかが何よりの見ものであろう。(寺田寅彦『アインシュタイン』青空文庫)
- (4) 仕方が無いから此の連中の内で聡明でも有り善良でも有る輩は、高級骨董の素晴らしい物に手を掛けたく無い事は無いが、それは雲に梯の及ばぬ恋路みたやうなものだから、矢張り自分等の身分相応の中流どころの骨董で楽しむことになる。(幸田露伴『骨董』青空文庫)

これらの表現は、文字通りには物体との接触に関わる意味を表している。(3)の「手を付ける」は、物体に〈手を付ける〉という物理的接触の意味を表す形式によって、〈物事に取り掛かる〉という、物事との関与の意味を表している。(4)の「手を掛ける」も、物体に〈手を掛ける〉という物理的接触の意味を表す形式によって、〈ある物事と関係する〉という、物事との関与の意味を表している。

物理的接触では、対象が我々の近くにあれば容易に触れることができるが、遠くにあれば手を伸ばすなどの労力が必要である。また、その行為は通常、自らの意思で行い、止めることができる。一方、物事との関与では、我々にとって馴染みのある物事や対処しやすい物事とは関与しやすいが、馴染みのない物事や対処が難しい物事であれば関与するのに労力が必要である。さらに、関与した物事との関係を自らの意思で断つことができる。このように、物理的接触と物事との関与という二つの事態は類似しており、この類似性により、物理的接触を表す形式で、物事との関

与の意味を表すことが可能になっている。

また、以下の例を見てみよう。

(5) 素人のくせに手を出した漁業に大失敗をして、危く倒産は免れたが、家産の大整理をしなければならなくなったものらしい。(豊島与志雄『怒りの虫』青空文庫)

(6) 果然、蠅男からの脅迫状だった。帆村探偵に、この事件から手を引かせようという蠅男の魂胆だった。(海野十三『蠅男』青空文庫)

これらの表現の文字通りの意味は、接触自体の意味を表しているのではないが、接触に関連する行為の意味を表している。(5)の「手を出す」は、文字通りには、対象に向けて〈手を出す〉ことを表しており、〈新たに(余計な)物事に関与する〉という慣用的意味を表している。この表現では、まず、対象に〈手を出す〉という文字通りの意味が表す行為を手段とする、〈物体に接触する〉という目的の意味がメトニミーによって生じている。そして、〈物体に接触する〉という物理的接触の意味から、〈新たに(余計な)物事と関係を持つ〉という、物事との関与に関する意味へと拡張している。(6)の「手を引く」は、文字通りには、物体から〈手を引く〉ことを表しており、慣用的意味としては、〈携わっていた物事との関係を断つ〉ことを表している。この表現ではまず、対象から〈手を引く〉という文字通りの意味が表す行為を手段とする、〈物体との接触を止める〉という目的の意味がメトニミーによって生じている。そして、〈物体との接触を止める〉という物理的接触に関する意味から、〈携わっていた物事との関係を断つ〉という、物事との関与に関する意味へと拡張している。以上のように、(5)、(6)は、文字通りの意味自体が接触の意味を表している(3)、(4)と異なり、文字通りの意味が表す身体的行為を手段とする、目的(物理的接触)の意味へとメトニミーによって拡張し、さらに、メトニミーによって拡張した物理的接触に関する意味が、前述の類似性により、物事との関与に関する意味へと拡張している⁷⁾。

(3)–(5)の文字通りの意味、あるいはそこからメトニミーによって拡張した段階の意味は、対象である物体との接触を表しており、慣用的意味は、対象である物事と関係を持つことを表している。一方(6)の文字通りの意味からメトニミーによって拡張した段階の意味は、対象である物体との接触を止めることを表しており、慣用的意味は、対象である物事との関係を断つことを表している。従って、(3)–(6)の表現には、〈接触する/接触を止める〉ことと、〈関係を持つ/関係を断つ〉ことの対応が認められる。

次に、以下の表現を見てみよう。

(7) 彼は新参でありながら藩の重要事項にまで手を伸ばしました。それに対して家臣達の中には不満を持つ者も出て来たと思います。

(<http://www.coara.or.jp/~doraemon/misa/history/h-bunkano.htm>)

(7)の「手を伸ばす」も、「手を出す」と同様、文字通りの意味が表す、対象に〈手を伸ばす〉という行為を手段とする、〈物体と接触する〉という目的の意味がメトニミーによって生じ、さらに、〈物体と接触する〉という物理的接触の意味から、〈本来関与しなくてもよい物事、自分の能力を超えた物事と関係を持つ〉という物事との関与の意味へと拡張している。物体に接触する

際に、接触する対象との物理的距離が近ければ、少し手を動かすだけで容易に触れることができるが、接触する対象との物理的距離が遠い場合には、自らその対象に向けて手を出す、あるいは手を伸ばすなどしなければならぬ。また、我々がある物事と関係を持つ時、その物事が我々にとって馴染みのあるものである場合や、我々に負担を与えないものである場合には、関与しやすいが、その物事が我々にとって馴染みのないものである場合や我々の負担となるものである場合には、関与しにくい。物体への身体的接触における「対象との物理的距離と、それに伴う接触のしやすさ」は、物事と関係を持つことにおける「物事に対する馴染み深さや負担のなさ」と、それに伴う関与のしやすさ」と対応する。これにより、「手を出す」、「手を伸ばす」、「手を付ける」などよりも、対象との距離が意識され、〈余計な物事と関係を持つ〉や、〈本来関与しなくてもよい物事や自分の能力を超えた物事と関係を持つ〉という慣用的意味を表すのである。さらに、「手を出す」よりも「手を伸ばす」の方が、物理的接触においても対象との距離は遠く、従って、慣用的意味が表す物事との関与の意味においても、「手を伸ばす」は本来関与すべき範囲や自分の能力の範囲を超えた物事と関与するということが含意されるのである。

また、接触する対象との距離ということに関連して、以下の例を見てみよう。

(8) 清康は三河一国を支配するまで勢力を大きくしたが尾張まで手を広げた時、守山攻めで近臣に25歳の若さで殺された。(http://www.mb.ccnw.ne.jp/hisao11/page.10.html)

(9) 統合医療的なアプローチとして、私は手近なものから始めるのが正しいと思っております。手近なものと言うのは、「費用が安い」「すぐ取り組める」「副作用の心配があまりない」と言ったことを指しています。

(http://daibutsuda.blog26.fc2.com/blog-entry-411.html)

(8)の「手を広げる」は、〈関与する範囲を大きくする〉という慣用的意味を表す。この表現ではまず、文字通りの意味が表す〈手を広げる〉という身体的行為を手段とする、〈接触可能な範囲を広げる〉という目的の意味が生じる。さらに、〈接触可能な範囲を広げる〉という物理的接触に関する意味から、〈関与する範囲を大きくする〉という物事との関与に関する意味へと拡張している。我々は、例えば直立した状態から両手(両脇)を広げることによって、接触可能な範囲を広げることができる。物事と関係を持つことにおいても、関係する範囲を広げることができ、両者は対応している。また、(9)の「手近な」という表現では、接触する身体部位と対象との物理的距離が近いことを表す表現で、関与する物事に対する扱いやすさを表している。つまり、物理的距離と精神的距離が対応していると思われる。

以上で見てきた慣用句に関わる概念メタファーは、以下のようなものである⁸⁾。

(10) 《物事との関与を、物体との接触を通して捉える》

Lakoff (1987: 386-387) は、概念メタファーの構造的対応に、存在論的対応(起点領域の要素と目標領域の要素の対応)と認識的対応(起点領域についての知識と目標領域についての知識の対応)があると主張している。(9)の概念メタファーには、起点領域である〈接触〉と目標領域である〈関与〉の間に、「接触対象である物体と関与する対象である物事」、「接触可能範囲と関与する範囲」、「接触対象への物理的距離と関与する物事に対する親しみやすさ・負担のなさ」と

いった、存在論的対応が認められる。また、この概念メタファーには、以下のような認識的対応がある。

- | | |
|---|--|
| <p>(11) <u>起点領域：〈物体との接触〉</u></p> <p>a. 物体に接触する</p> <p>b. 物体との接触を止める</p> <p>c. 接触可能な範囲を広げる</p> <p>d. 接触する対象との物理的距離が近ければ接触しやすく、対象との物理的距離が遠ければ接触しにくい</p> | <p><u>目標領域：〈物事との関与〉</u></p> <p>a. 物事に関与する</p> <p>b. 物事との関係を断つ</p> <p>c. 関与する範囲を広げる</p> <p>d. 関与する物事が馴染みのあるものや負担の少ないものであれば関わりやすく、その物事が馴染みのないものや負担の大きいものであれば関わりにくい</p> |
|---|--|

(3)–(5) は、上記の (11a) の対応を反映しており、(6) は、(11b) を反映しており、(8) は (11c) を反映しており、(7)、(9) は (11d) を反映した表現である⁹⁾。このように、文字通りには〈物体への接触〉に関わる意味を表す「手」を含む慣用句は、〈物体との接触〉と〈物事との関与〉という二つの領域における広範囲の対応関係を反映し、〈物事との関与〉に関するそれぞれの慣用的意味が成立している。

ここで、以下の慣用句を見てみよう。

- (12) かつての敵と手を結ぶ。

(<http://www.news-digest.co.uk/news/columns/tree/3799-1155.html>)

- (13) その時、三吉は、この婦人の口から、正太が既に名古屋の相場で失敗したことを聞いた。この婦人の若い養子も、正太と手を組んで、大きな穴を開けたと聞いた。(島崎藤村『家(下巻)』青空文庫)

- (14) その晩芳村は行ききりであったが、お増と綺麗に手を切ったことは、翌朝芳村が友達のところへやって来てから、やっと解った。(徳田秋声『足跡』青空文庫)

これらの表現も、文字通りには対象と〈接触する/接触を止める〉ことを表す形式で、対象と〈関係を持つ/関係を断つ〉ことを表しており、文字通りの意味が表す行為と慣用的意味が表す行為は、物理的接触と物事との関与で、領域が異なるように思われるが、これまで見てきた《物事との関与を、物体との接触を通して捉える》という概念メタファーとは異なる認知プロセスを経て慣用的意味が成立していると考えられる。(12)の「手を結ぶ」の文字通りの意味は、相手と〈手をつなぐ〉ことを表し、慣用的意味は、〈協力する〉ことを表している。また、(13)の「手を組む」は、文字通りには、相手と〈手(を含む腕)を組む〉ことを表し、慣用的意味は、〈協力する〉あるいは〈仲間になる〉ことを表している。これらの例では、手をつなぐ、あるいは手(を含む腕)を組むという、文字通りの意味が表す行為と、協力関係を築くことは時間軸上連続しており、具体的な身体的行為を表す形式で、対象との関与の意味を表している。従って、(12)、(13)の慣用的意味は、メトニミーによって成立している。また、(14)の「手を切る」では、文字通りの意味は〈(結んでいた)手を離す〉ことを表し、慣用的意味は〈(保持していた)関係を断つ〉

ことを表している。この表現でも、文字通りの意味が表す行為と慣用的意味が表す行為は時間軸上連続して生じるものであり、具体的な身体的行為を表す形式で、対象との関与に関する意味を表しており、メトニミーに基づき慣用的意味が成立している。

(12)–(14)の表現も、(3)–(9)の表現と同様、文字通りの意味は手による接触に関する意味を表しており、慣用的意味は対象との関与に関する意味を表しているが、(3)–(9)と(12)–(14)では、文字通りの意味が表す行為と慣用的意味が表す行為が、同一対象に対して行われているか否かという点で異なる。以下の点線の矢印はメタファーによる拡張((5)–(7)はメトニミーに基づくメタファー)を表し、実線の矢印はメトニミーによる拡張を示す。

(15) a. 「手を付ける」等((3)–(9))

物体との身体的接触 (文字通りの意味)	----->	物事との関与 (慣用的意味)
------------------------	--------	-------------------

b. 「手を結ぶ」等((12)–(14))

人との身体的接触 (文字通りの意味)	—————>	人との関与 (慣用的意味)
-----------------------	--------	------------------

(3)–(9)の文字通りの意味が表す行為の対象は物理的「物体」であり、慣用的意味が表す行為の対象は「物事」である。一方、(12)–(14)の文字通りの行為の対象は人であり、慣用的意味が表す行為の対象も、それと同じ人物である。つまり、(12)–(14)の文字通りの意味が表す行為と慣用的意味が表す行為は、同一対象に対して行われる。また、(3)–(9)と(12)–(14)では、文字通りの意味が表す行為と慣用的意味が表す行為を結びつける関連性も異なる。(3)–(9)では、二つの行為は、二つの領域における構造的類似性によって結びついている(つまり、二つの領域における複数の要素同士、二つの領域に関する知識同士が対応しており、二つの領域の構造が類似している)。一方(12)–(14)では、二つの行為は、時間軸上の連続性(因果関係)によって結びついている。以上の点で、(3)–(9)と(12)–(14)の慣用的意味の成立に関与する認知プロセスは異なるといえる。

ここで、以下の例を見てみよう。

(16) だが、ソヴェトのピオニェールは、世界の同志となんとかして手を握ろうとするし、ブルジョア国のピオニェールがそれを望んでいることは、もちろんだ。(宮本百合子『ソヴェトのピオニェールはなにをして遊ぶか』青空文庫)

(16)の「手を握る」も、《物事との関与を、物体との接触を通して捉える》という概念メタファーによって慣用的意味が生じているのではないが、因果関係に基づくメトニミーによって慣用的意味が生じる(12)–(14)とも異なるように思われる。(16)の「手を握る」は、〈協力関係を築く〉という慣用的意味を表すが、「手を握る」には〈協力関係を築く〉の他、〈同盟を結ぶ〉という慣用的意味も表す。これらの意味は、次のようなプロセスを経て成立している。まず、「手を握る」の文字通りの意味が表す〈握手する〉ことは、〈文書に調印する〉こと等と並んで、〈同盟を結ぶ〉ことの部分を形成する。従って、〈同盟を結ぶ〉という意味は、〈握手する〉という意味から、部分全体関係に基づくメトニミーによって拡張している。さらに、「手を握る」が(16)のように〈協

力関係を築くことを表す場合、〈同盟を結ぶ〉ことは〈協力関係を築く〉ことの一種であるので、〈協力関係を築く〉という意味は、〈同盟を結ぶ〉という意味から、類種関係に基づくシネクドキーによって生じている¹⁰⁾。

3 文字通りの意味が「足」に関わる行為を表す慣用句

次に、「足」を構成要素に持つ以下の慣用句を見てみよう。

- (17) 国字の世界に足を踏み入れて十数年たった。その間、国内外の研究者や人名研究の大家、インターネットに強い同好の士と知り合うなど、様々な出会いがあった。

(<http://ksbookshelf.com/nozomu-ooohara/Nikkei.htm>)

- (18) トレントの立場からしても憧れの世界に足を突っ込むことができたという感じですし、キットや他のライダーたちと出会って自分の世界を広げられたことは、彼自身にとってもすごく意味のあることだったと思います。

(<http://www.toeihero.net/archive/dragonknight/09.shtml>)

- (19) ユニバーサル造船は日立造船の造船部門と旧NKKの造船部門が統合されてできた造船会社であるが日立造船はこの合弁会社から足を抜くとしている。

(<http://d.hatena.ne.jp/nsw2072/20080112>)

(17)の「足を踏み入れる」の文字通りの意味は、〈(ある場所に)足を踏み入れる〉ことを表し、慣用的意味は、〈ある世界・分野に関与する〉ことを表している。また、(18)の「足を突っ込む」は、文字通りには〈(ある場所に)足を勢い良く入れる〉ことを表し、慣用的意味は、〈ある世界・分野と勢い込んで関わる〉ことを表している。さらに、(19)の「足を抜く」の文字通りの意味は、〈(ある場所から)足を抜く〉ことを表し、慣用的意味は、〈ある世界・分野との関係を断つ〉ことを表している。これらの表現では、文字通りの意味での、踏み入れたり、突っ込んだり、抜いたりする場所は、物理的なものであるのに対し、慣用的意味における場所は、特定の嗜好や方針などによって結びついた世界・分野という、抽象的なものである。さらに、これらの表現は、足に関する身体的行為を表す形式で、ある世界・分野との関与に関連する意味を表しており、身体的行為の領域から物事との関与の領域へとメタファーによって意味が拡張していると考えられる。

これらの表現では、文字通りの意味での「踏み入れる」、「突っ込む」、「抜く」は、例えば「洞窟に足を踏み入れる」、「ブーツに足を突っ込む」、「ズボンから足を抜く」のように述べることも可能であり、その行為の対象や場所は限定されない。しかし、(17)–(19)の文字通りの意味は、粘性の液体からなる泥沼のようなものに足を入れたりそこから足を抜いたりすることを表していると考えられる。というのも、これらの表現が慣用的意味で用いられる時、液状で粘性を持つ「泥沼」のような表現や、液体に用いられる「どっぷり」との共起が可能なためである。まず、以下の例では、「泥沼」との共起が可能であることから、足を入れたり抜いたりするものが、単なる液体ではなく、泥沼のような粘性を持った液体であることが分かる。

- (20) いまや、わが国財政は、果てしなきどろ沼に足を踏み入れ、昭和四十年代当初は国債を抱いた財政であったものが、やがて国債に抱かれた財政となり、いまや国債にのみ込まれた財政へと変貌し、破局的状況を迎えるに至ったのであります。

(<http://kokkai.ndl.go.jp/SENTAKU/syugiin/087/0001/08702150001008a.html>)

- (21) すでに「邪馬台国論争」は「神学論争」。簡単に決着がつきそうにありません。完全にドロ沼です。ちょっとモスクワまで攻めるつもりが、終わりが見えない事態になってしまったように、下手にこのドロ沼に足を突っ込むと抜け出せなくなってしまうので、いつものように浅く。表面だけを適当に。

(<http://hosokawa18.exblog.jp/9971393/>)

- (22) 戦争自体も、ベトナム戦争の教訓通りに、まず日本初め親米諸国軍の派兵を強要し、次に「イラク化」というのか、六月をメドに国内政権に権力を委譲して、大統領選挙前に泥沼から足を抜こうとしている。

(<http://www1.jca.apc.org/iken30/News2/N82/TakahashiTaketomo.htm>)

これらの例では、泥沼のような粘性の液体に足を入れると、その中では自由に足を動かさないことや、そこから足を抜くことが困難になることと、物事との関与の程度が大きいと、自由に振る舞うことができないことや、関係を断つことが困難になることが対応している。また、以下の例を見てみよう。

- (23) 鋺（こて）ひとつで造り上げる土壁の魅力にどっぷりと足を踏み入れ抜け出せなくなりました。(http://www.actfactory.net/iidasakan/syoknin/syok_top.htm)

- (24) 18歳の時に、打楽器奏者を志してNYのジュリアード音楽院へ出向きましたが、NYではその代わりにJazzにどっぷり足を突っ込むことになりました。

(http://www001.upp.so-net.ne.jp/jim_hall_maniac/link46.html)

(23)、(24)は、「足を踏み入れる」、「足を突っ込む」が、液体の中に十分に浸っているさまを表す「どっぷり(と)」と共起している。これらの例では、文字通りの意味が表す〈液状のものに深く足を入れる〉ことと、〈ある分野・世界に深く関わる〉ことが対応している。さらに、以下の例でも(泥)沼の深度が問題になる。

- (25) 「そこでぜひ聞かせて欲しいのですが皆さんがオーディオの泥沼に足を突っ込むきっかけはなんだったのでしょうか？」[中略]「オーディオの泥沼改めオーディオの底無し沼にドブプリ漬かっています。もちろんもう抜け出せません。」

(http://audiofan.net/board/log/tree_98.htm)

(25)の文脈では、足を突っ込んだ泥沼が底なし沼であり、足だけでなく身体が浸かる様子により、当該分野との関与の程度が大きく関係を断つことが困難である様子が表されている。ここでは、泥沼という粘性を持ったものであれば足を抜くことが(粘性を持たない液体と比較して)困難であり、さらにそれが底なし沼のように深さのあるものであれば、そこから抜け出すのはいっそう困難であり、場合によっては不可能であることが表される。

以上の点から、(17)－(19)の文字通りの意味と慣用的意味の間には、〈(泥)沼にはまる〉こ

とと〈ある世界・分野に関与する〉こととの対応関係が認められ、以下のような概念メタファーが関わっていると考えられる。

(26) 《ある世界・分野に関与することを、(泥)沼にはまることを通して捉える》

この概念メタファーには、「泥沼などはまる場所と関与する世界・分野」, 「泥沼などの粘性や深さと関与の程度」などの存在論的対応と、以下のような認識的対応がある。

(27) 起点領域：

目標領域：

〈(泥)沼にはまること〉

〈ある世界・分野との関与〉

a. (泥)沼にはまる

a. ある世界・分野と関与する

b. (泥)沼には粘性や深度があり, 粘性が強ければ強いほど, あるいは深くはまればはまるほど, 足を自由に動かせなくなり, また足を抜くのが困難になくなる

b. ある世界・分野との関与には程度があり, その程度が大きいほど, 自由に振る舞うことができなくなり, また関係を断つのが困難になる

c. (泥)沼から足を抜き, 泥を落とし
てきれいにする

c. ある世界・分野との関係を断ち, まっ
とうになる

足を踏み入れたり突っ込んだり抜いたりする場所は, 内部に足を入れたりそこから抜いたりするのに多少の困難を伴う粘性の液体, つまり, 泥沼のようなものであるため, 慣用的意味では, ある世界・分野との関係を断つ際の困難さが表される。これに関連して, 以下の表現を見てみよう。

(28) UOのゲームに慣れてくると, 最初に作ったキャラクターではプレイしたくなくなるかもしれません。[中略] 最初のキャラクターはブリタニアという架空世界にちょっと足を踏み入れて, 様子を見るためのキャラクターだと思っておくのもいいでしょう。(http://ultimaonline.jp/beginners/start/character/)

(29) クラシック, ジャズ, ファンク, ブルース, ソウル, レゲエ, ダブ, ヒップホップ, R & B, ダンスミュージック……。これらに関してはまだちょっと足を突っ込んだだけに過ぎない。ロックンロールほどドブプリつかったわけじゃない。

(http://blog.livedoor.jp/ryovsky1309/archives/50540826.html)

「足を踏み入れる」と「足を突っ込む」は, 液状の物質の中に十分に浸かっているさまを表す「どっぷり」との共起が可能であり, この場合, 泥沼の深さとある世界・分野との関わりが対応しており, (27b)の対応を反映していると考えられる。一方, これらの表現は, (28), (29)のように「ちょっと(だけ)」と共起することもでき, この場合, 泥沼の深くにまで足を浸していないことと, ある世界・分野との関与の程度がそれほど大きくないことが対応している。またこのことは, (27b)とは逆で, 泥沼に足が深くはまっていなければ, そこから足を抜きやすいということと, ある世界・分野と関わる程度が小さければ, 関係を断ちやすいということの対応を含蓄している。

最後に, 以下の慣用句も〈ある世界・分野との関係を断つ〉ことを表している。

(30) こうして君子は十年という長い間の旅芸人から足を洗うことができた。(山本禾太郎

『抱茗荷の説』青空文庫)

この表現は、(27c) の対応関係を反映している。ただし、(17)–(19) の慣用的意味の関わる対象は特に限定されない一方で、(30) の「足を洗う」の慣用的意味は、関係を断つ対象が悪業や賤業などの良くない対象に限られる¹¹⁾。これは、(17)–(19) の表現が、「泥沼」の粘性や深度という側面を反映している一方で、(30) の「足を洗う」は、「泥沼」(泥) の汚さという側面に焦点が当たっているためである。従って (30) には、《善悪を、身体(部位) の清濁を通して捉える》という概念メタファーも関与しており、この概念メタファーは、2.2 で考察した「手」を構成要素に持つ慣用句にも動機づけを与えているので、それらと共に、次節で考察する。

4 文字通りの意味が身体(部位) の清濁に関わる「手」あるいは「足」の慣用句

以下は、文字通りの意味が身体(部位) の清濁に関わる表現である。

(31) 脱税は犯罪。それは分かっている。だが、喫茶店のオーナーである私は手を汚した。

(<http://the-zange.blogspot.jp/2008/06/vol15.html>)

(32) これで、この泥坊が足を洗えりゃ、俺は一つの陰徳をしたというもんだ。(小栗虫太郎

『人外魔境 水棲人 (インコラ・パルストリス)』青空文庫)

(31) の「手を汚す」は、文字通りには〈手を汚す〉ことを表し、慣用的意味としては〈悪事を働く〉ことを表している。(32) の「足を洗う」は、文字通りには〈足を洗う〉ことを表し、慣用的意味としては〈賤しい勤めや悪行を止めて真面目になる〉ことを表している。これらの例では、〈身体部位を汚す/洗う〉ことを表す形式によって、〈悪行を行う/止める〉という慣用的意味を表している。

善悪が清濁によって捉えられることは、これまでも論じられている。例えば、Kövecses(2002: 210) は、〈汚い〉ことを通して〈不道徳な〉ことを捉える *catch somebody red-handed* (〈犯罪を犯した人を逮捕する〉) や、〈きれいな〉ことを通して〈潔白な〉ことや〈道徳的な〉ことを捉える *have clean hands* (〈潔白である〉、〈道徳的に振る舞う〉) は、AMORAL IS DIRTY/ETHICAL IS CLEAN という概念メタファーによって動機づけられると主張している。また、鍋島(2001) は、白黒(清潔と汚れ)、高低、整乱、直曲(真っ直ぐなものと曲がっていること) を表す表現が、モラル的な価値判断(正邪) を表す際に用いられるとして、これらの表現にはモラル・メタファーが関わると主張している。以下は、鍋島 (*ibid.*: 121–124) の挙げるモラル・メタファーである。

- (33) a. 正しいことはきれいなことである：邪悪なことは汚れていることである
b. 正しいことは高いことである：邪悪なことは低いことである
c. 正しいことは整っていることである：邪悪なことは乱れていることである
d. 正しいことは真っ直ぐなことである：邪悪なことは曲がったことである

これらの四つの概念メタファーは代表的なものであり、(33a–d) のメタファーはさらに細分化される。ここでは、本節に関与する (33a) の用例を紹介する(鍋島 *ibid.*: 121)。

- (34) a. 白い<>黒い：クロ、灰色高官、黒い霧、身の潔白を証明する

- b. 純粋なく>不純な： 不純な動機
- c. 奇麗なく>汚れた： 汚れた政治家, 手を汚す, 汚職事件, 無垢な
- d. 清潔なく>不潔な： 不潔な行為, クリーンな政治家

これらの例では、白が無罪、善として、黒が有罪、悪として捉えられ、不純、汚れ、不潔などの概念が、倫理的な低さと捉えられている¹²⁾。(33a)は(34a-d)を包括する概念メタファーであり、その下位メタファーとして、(33a-d)にそれぞれ個別の概念メタファーが存在する¹³⁾。鍋島 (*ibid.*: 124-125)は、(33)の四つのモラル・メタファーの起点領域と目標領域には、「一方向性」という共通の特性があるとしている。例えば白黒の場合、赤に黒を混ぜるとある時点でどんどん黒くなっていくが、赤に白を混ぜても、ピンクにはなっても白にはならず、白から黒になるのは簡単だが、黒から白に向かうのは困難であるという一方向性がある。また、高低に関しては、重力が働くため、物体の上から下への移動は簡単だが、下から上へは力をかけてやらない限り自動的には上がっていかず、ここにも一方向性が認められる。さらに、整乱については、標準的な形が一つしかないのに対して、乱れ方は、乱れる、欠ける、曲がるなど、様々であり、標準形にするのは難しいが、標準形でなくするのは簡単であるという一方向性がある。鍋島 (*ibid.*: 125)は、このように、四つの全ての起点領域に共通して「一方向性」が認められる場合、それ自体が、目標領域であるモラル領域の抽象的な構造となっていると主張している。つまり、モラルの概念化として、「正しいことを貫くのは困難だが、邪悪な道に走るのは容易である」という一方向性があるということである。

以上の議論を参考に、《善悪を、身体(部位)の清濁を通して捉える》という概念メタファーの認識的対応を示すと、以下ようになる。

- | (35) 起点領域：〈身体(部位)の清濁〉 | 目標領域：〈善悪〉 |
|--|---|
| a. 汚いものに身体が接触して、身体が汚れる | a. 悪行に関わって、不道徳になる |
| b. 身体を洗って身体の汚れを落とすことによって、身体がきれいになる | b. 悪行を止めることによって、まっとうになる |
| c. 汚れは嫌悪感を誘発し、清潔さは好感を誘発する(身体は清潔にしておくことが好ましいものとして推奨される) | c. 不道徳な振る舞いは嫌悪感を誘発し、道徳的な振る舞いは好感を誘発する(道徳的な振る舞いは好ましいものとして推奨される) |
| d. 身体を汚すのは簡単だが、清潔にしておくのは困難である | d. 悪行に走るのは容易だが、善行を貫くのは困難である |

(31)の「手を汚す」、(32)の「足を洗う」は上記の対応を反映している。これらの慣用句において、身体部位の「手」と「足」が選択されるのは、2の「手」の慣用句の節で述べた《物事との関与を、物体との接触を通して捉える》という概念メタファーと、3の「足」の慣用句の節で述べた《ある世界・分野に関与することを、(泥)沼にはまることを通して捉える》という概念メタファーが関与するためである。つまり「手を汚す」では、手による物体との接触によって物事と関与す

ることを表し、その接触の対象が汚いものであれば、関与する対象が悪行であることになる。また、「足を洗う」では、泥沼などにはまった結果としての汚れを落とすことに焦点があるため、関係を断つ対象が悪行であることになり、足を洗うということはまっとうになることと結びつく。従って、「手を汚す」と「足を洗う」は、《善悪を、身体（部位）の清濁を通して捉える》という概念メタファーと、2.2, 2.3で論じた物事との関与に関する概念メタファーの両者が関わっているのである。

次に、以下の例を見てみよう。本節で《善悪を、身体（部位）の清濁を通して捉える》という概念メタファーを独立して認めるのは、「手」や「足」以外の身体部位詞を構成要素に持つ以下のような慣用句にも、同様の動機づけが存在するためである。

(36) 善良な少女が一朝の過失に身を汚されて心を悩ました揚句、良心や理智が昏迷し、麻痺して、遂に棄て鉢的の不良少女になる場合も亦(また)決して少くないと信ずる。(杉山崩圓(夢野久作)『東京人の墮落時代』青空文庫)

(37) 私の心を傷(きずつ)けられた口惜(くや)しさと、私の体を汚された恨めしさと、その二つのために死のうとする。(芥川龍之介『袈裟と盛遠』青空文庫)

(36)の「身を汚される」、(37)の「体を汚される」は、文字通りには〈身体を汚される〉ことを表し、慣用的意味としては〈(女性が)貞操を破られる〉ことが表されている。これらの例でも、身体を汚されることと貞操を破られることは、(31)、(32)と同様、《善悪を、身体（部位）の清濁を通して捉える》という概念メタファーの関与が認められる。つまり、身体を汚されて不快であることと、悪行を行われて(貞操を破られて)嫌悪感が生じるという情緒の対応と、汚れるのは簡単だがきれいにするのは困難であることと、一度貞操を破られると元には戻らないということの一方方向性の対応が見られるのである。また、これらの例において、汚れる対象に特定の部位ではなく身体全体を表す「身」、「体」が用いられるのは、性的行為を描写するための婉曲表現であるためだと考えられる。

最後に、以下の例を見てみよう。

(38) ア教授は、もう十年も前からこの種の研究に手を染めていたが、非常に困難な研究があるので、最初の七年間は全く何の成果もあがらなかった。(海野十三(丘丘十郎)『地球発狂事件』青空文庫)

(39) 学者や芸術家はその純粹を保とうとするほど、恐らく局限せられた實際社会の改造に指を染めてはなるまい。かの人たちも一面には我々と同じ現代の一人である以上現代を最も多く眼中に置くことは勿論であるが、現代のために永遠を犠牲にしてはならない。(与謝野晶子『鏡心灯語 抄』青空文庫)

「染める」は本来、色のある液に物体を浸して物体に色をつけることを表し、必ずしも〈汚す〉ことを含意しない。しかしながら、(38)、(39)の関係を持つ対象は、波線部が示す「困難な研究」(成果を得るのに大変な労力と時間を費やすもの、あるいは成果が期待できないもの)や「實際社会の改造」(学者や芸術家にとって時に己の信念や所行の障害となるもの)であり、以下の(40)のように、明らかに好ましい対象との関与を表す場合にはこれらの表現を用いることはでき

ない。

(40) *慈善事業に {手/指} を染める。

これはおそらく、文字通りの意味が表す〈手を染める〉ものが、我々にとって好ましくないもの(血など)であるためだと考えられる。つまり、染料で染まった布は汚れているとはいえないが、血に染まった布は、鍋島(2001)の述べる「自然な推論」によって、汚れているものとして理解されるのである¹⁴⁾。これにより、「手を染める」、「指を染める」の文字通りの意味は、〈手(指)を汚す〉こととして理解される。従って、これらの慣用句は、《物事との関与を、物体との接触を通して捉える》と《善悪を、身体(部位)の清濁を通して捉える》という二つの概念メタファーに関連して、好ましくない物事と関与することを表すのである。もちろん、「手を染める」、「指を染める」の慣用的意味が表す関係を持つ対象は、「手を汚す」の悪行への関与のように必ずしも強い嫌悪感を誘発するものではないが、面倒なことなど、我々にとって好ましくないと判断されるような対象であり、(40)の「慈善事業」のような善行は、我々にとって好ましいものとして推奨されるものであるため、(34)に挙げた対応に反するのである。また、血が布に染み込むのは容易に生じることだが、ひとたび染まってしまうとその血を落とすのは困難であるという一方向性と、好ましくないことに関与するのは簡単だが、関係を断つのは困難であるという一方向性も対応する。従って、「手を染める」、「指を染める」は、「染める」自体は必ずしも汚れることは含意しないが、《善悪を、身体(部位)の清濁を通して捉える》という概念メタファーによって説明できる。

以上の考察から、文字通りの意味が身体(部位)の清濁に関する意味を表す慣用句には、《善悪を、身体(部位)の清濁を通して捉える》という概念メタファーが関与しているといえる。この概念メタファーでは、起点領域と目標領域の間に(35)のような構造的対応が認められるが、これまで見てきた概念メタファーとは異なり、身体(部位)の清濁に対するプラス・マイナスの評価と、善悪に対するプラス・マイナスの評価が対応しており、特にこの価値的・評価的類似性が、二つの領域を強く結びつけていると考えられる。

5 おわりに

本稿では、身体部位詞「手」または「足」を構成要素に持つ慣用句の比喩的意味について考察し、それらの成立過程に対して我々の日常経験やそれについての知識がどのように動機づけを与えているかを明らかにした。本稿で対象としたのは、「手を出す」、「手を引く」、「手を広げる」のように、メタファーの起点と目標の間に構造的類似性が認められるもの、つまり、他の表現と共通の基盤に基づき慣用的意味が成立している慣用句である。このような一連の慣用句を分析対象とすることによって、慣用句の意味が十分に動機づけられているということを示すことができただけでなく、それらの意味の拡張は体系的に行われるものであることを明らかにできた。

Nunberg *et al.* (1994 : 493) は、慣用表現には、「我々が関心を持ち、且つ頻繁に生じる出来事や状況を、具体的な事物との類似や関連によって記述し、また、暗黙のうちに説明するという性

質」があり、また、「ある事態に対する特定の評価や感情的態度を示唆するために用いられる」ものであると主張している。我々は、物事との関与という、日常生活において頻繁に生じ、我々が関心を持ちながらもその内実を明確には表しにくいものを、我々にとって極めて具体的な身体動作を通して捉え、表現している。また、そうすることによって、特定の評価や感情的態度を示唆することができる。例えば、物事との関与に関して、単に「ある分野と関わる」と表現せずに、「ある分野に足を踏み入れる」と表現することで、それに関与する際の意気込みや、関与を断つ際の困難さなども喚起され、単に「関わる」と表現するだけでは伝えきれない含意を伝えることが可能になるのである。

注

- 1) 本稿は、博士学位論文(有蘭 2009)の一部を加筆修正したものである。
- 2) 本稿では、言語表現の意味や概念を〈...〉で表記する。
- 3) 伊藤(1999)の「慣用句」という用語は、分解可能な表現(有蘭(2005)の「慣用の連結句」)も含んでおり、本稿における狭義の「慣用句」(個々の構成要素の意味が慣用意的意味の部分にそれぞれ貢献しない表現)とは異なる。
- 4) 伊藤(1999:97)は、慣用句の中で、意味的に中核的機能を果たしている構成要素が担っている比喩的意味(つまり、分解可能な慣用表現の意味)は、「メタファーやメトニミーに基づいている場合がある」と述べ、慣用表現の意味の成立には認知プロセスが関与する場合があることを示唆しているが、構成要素自体が比喩的意味を持たない慣用句について、その意味の成立に認知プロセスが関与するかどうかということには触れていない。
- 5) ただし、粉山(1997:42)が主張しているように、「油を売る」など、「構成語の意味の総和としての意味と慣用的意味の比喩に基づく関連付けが不能」なものもある。
- 6) また、本稿では紙面の関係上深く立ち入らないが、メタファーの基盤となる二つの事物や概念領域間の類似性と、メトニミーの基盤となる二つの事物や概念領域間の近接性がどのように区別され、またどのように相関しているかについて再検討が必要とする議論もある。例えば、Barnden(2010)は、類似性対近接性に基づくメタファーとメトニミー間の従来の区別には議論の余地があるとし、メタファーとメトニミーは、近接性、類似性、起点と目標のリンク、領域やフレームとの相関、構造的対応等の多面的な要因が関わっており、単純な定義付けや区別は困難であることを主張している。
- 7) なお、これらの表現は、メトニミーとメタファーに基づき文字通りの意味が拡張して慣用的意味が生じているが、メトニミーによって拡張した段階の意味は持たない。
- 8) なお、ここでのA IS Bという大文字の表記は、概念同士を関連付ける認知プロセスを示している。本稿において日本語表現を動機づける概念メタファーを表記する際には、Lakoff and Johnson(1980)、Lakoff(1987)、Kövecses(2002)などの“TARGET IS SOURCE”にこれに対応させ、《目標を、起点を通して捉える》と表記する。本稿では、概念メタファーにおけるTARGET(目標)には慣用的意味が関わる行為や状態が該当し、SOURCE(起点)には、表現の文字通りの意味が表す具体的な身体部位に関わる行為や状態が該当する。
- 9) (11d)の対応は、「身近な存在」のような例においても見られる。
- 10) ただし、同盟締結のフレーム内において、〈握手する〉ことが必ず〈同盟を結ぶ〉ことの前に行われるのであれば、当然そこに時間的な隣接性(あるいは、場合によっては因果関係)を認めることも可能であり、

その場合は (12)–(14) と同様のプロセスと考えることも可能である。

- 11) ただし, (17)–(19) では, 関与する世界・分野は悪業や賤業に限られはしないが, 関与の程度が大きければ身動きが取れなくなるような可能性を含んでいる。
- 12) 鍋島 (2001) には, 「A <> B」という表記に関する説明はないが, これは, A と B という二つの概念が, ある価値に対する同じスケール上の両極にあることを示していると思われる。また鍋島は, 黒が倫理的な悪として捉えられる基盤は, 汚れとの概念的共起関係であると主張している (鍋島 *ibid.*: 121)。通常, 語を理解する際には, 「落ちた→下にいった」のような論理的な推論が働くが, 「黒い→汚い」, 「汚れている→不潔である」という推論は, 論理的ではない, 確率的推論であり, 鍋島 (*ibid.*: 126) はこれを「自然な推論 (Natural Inference)」と名付けている。この自然な推論は, 以下の表現が〈汚い〉という意味で理解されることを説明する。
- (i) 真っ黒になった襟首 (鍋島 *ibid.*: 126)
- 黒いことは必ずしも汚れていることを含意しないが, (i) は, 汚い, という意味で理解される。また, 不潔であることと汚れていることに関して, 病原菌を持っている場合など, 不潔ではあっても汚れているとはいえないこともある。このように, 黒いことや不潔であることと, 汚れていることは, 厳密には異なる概念であるにもかかわらず, 混同されることが多い。これは, 自然な推論が機能しているためである (鍋島 *ibid.*: 126–127)
- 13) 鍋島 (2001) は個別のメタファーを一つ一つ挙げてはいないが, 例えば (34a) では, 「無罪であることや善いことは白いことである: 有罪であることや悪いことは黒いことである」のようなメタファーの存在が考えられる。
- 14) これは, 前述の AMORAL IS DIRTY の例である *to catch somebody red-handed* にも当てはまる。

参考文献

- Barcelona, A. 2000. “On the Plausibility of Claiming a Metonymic Motivation for Conceptual Metaphor.” In Barcelona, A. (Ed.), *Metaphor and Metonymy at the Crossroads: a Cognitive Perspective*. pp. 31–58. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Barnden, J. A. 2010. “Metaphor and Metonymy: Making their Connections more Slippery.” *Cognitive Linguistics* 21 (1): 1–34.
- Croft, W. 1993. “The Role of Domains in the Interpretation Metaphors and Metonymies.” *Cognitive Linguistics* 4: 335–370.
- Gibbs, R. W. and N. P. Nayak. 1989. “Psycholinguistic studies on the syntactic behavior of idioms.” *Cognitive Psychology* 21: 100–138.
- Goossens, L. 2002 [=1990]. “Metaphtonymy: The Interaction of Metaphor and Metonymy in Expressions for Linguistic Action.” In Dirven, R. and Porings, R. (Eds.), *Metaphor and Metonymy in Comparison and Contrast*. Pp. 349–377. Berlin/New York: Mouton de Gruyter. (Reproduced with slight changes from the paper with the same title in *Cognitive Linguistics* 1 (3): 323–340).
- Kövecses, Z. 2002. *Metaphor, a Practical Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Lakoff, G. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things. What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, G. and M. Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press.

- Langacker, R. W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar Vol. 1: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- . 1993. “Reference-point Constructions.” *Cognitive Linguistics* 4: 1-38.
- Nunberg, G., I. A. Sag and T. Wasow. 1994. “Idioms.” *Language* 70-3: 491-538.
- 有蘭智美. 2005. 「身体部位詞（「手」, 「口」）を含む慣用表現の意味分類」『日本認知言語学会大会論文集』5: 487-497.
- . 2009. 『身体部位詞を構成要素に持つ日本語慣用表現の認知言語学的研究』. 名古屋大学大学院国際言語文化研究科. 博士学位論文.
- 伊藤眞. 1999. 「慣用句の具象性についての一考察」『言語文化論集』51:95-177. 筑波大学現代語・現代文化学系.
- 鍋島弘治朗. 2001. 「『悪に手を染める』—比喩的に価値領域を形成する諸概念」『大阪大学言語文化学』10: 115-131.
- 棚山洋介. 1997. 「慣用句の体系的分類—隠喩・換喩・提喩に基づく慣用的意味の成立を中心に—」『名古屋大学国語国文学』80: 29-43
- . 2002. 『認知意味論のしくみ』 東京: 研究社.

用例出典

用例について、引用例がインターネット上に公開されているホームページからの引用である場合、例文後の（ ）内に引用先のURLを示した（検索エンジン：<http://www.google.co.jp/> 検索時期：2013.7.23～2013.11.10）。また、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）からの引用例の場合には、例文後の（ ）内に作者及び作品名を示した。例文後に出典が示されていないものは、著者の作例である。